596 移植腎のMR－CT

縄野 繁，（国立佐倉 放科）有水 昇，（千大 放科）
落合武徳，（千大 二外）池平博夫，福田信男，舘野之男，
（放医研）

MR－CTでは，ヨード造影剤やアイソトープを使用せずに腎皮質と腎髄質を区別して描出できるため，移植腎の機能や拒絶反応の有無などについて有用な情報を与えてくれるものと思われる。また，電気的に断層面を得るため，冠状断層や矢状断層が容易に得られるが，最近では斜位断層も可能となったため，移植腎の形態を把握するうえでも有用であると思われる。

今回，我々は長期腎移植患者や，拒絶反応患者にMR－CTを施行したので報告する。使用した装置は，放医研に設置されている常伝導0．1Tesla－CTである。

597 椎体病変における核医学検査とMRI
－特に転移性骨腫瘍と変形性疾患の鑑別について－

杉村和朗，平田みどり，金川公夫，浜田俊彦，
橋本今日子，山崎克人，鍋嶋康司，吉田 裕，
檜林 勇，西山章次 （神戸大・放）

骨シンチグラフィは sensitivityが高く，他のmodalityに比べて，骨の変化を早期にとらえ得るとされているが，specificity に劣っており，しばしば骨転移か否かの判定が困難なことがある。今回転移性骨腫瘍10例，悪性所見の無い椎体の変形性疾患 8例を含む25例に対して，骨シンチグラフィ，^{67}Gaシンチグラフィ，MRI を行ない，それらの所見について検討した。MRI は原則として矢状断層で，IR 2100/500，SE 2100/40，SE 2100/80，SE 200/40 のパルス系列で施行した。骨シンチグラフィでは転移性腫瘍 1例を除いて病巣への集積を認めた。^{67}Gaシンチグラフィの集積は，転移性腫瘍と変形性疾患の間で差を認めた。 MRIでは転移性腫瘍の全例で存在診断が可能であり，シンチグラフィに優っていた。一方，変形性疾患も，椎体の変形以外に，骨髄の輝度変化も認めた。T1，T2値を測定し得た症例では，転移性腫瘍，変形性疾患共にT1，T2値の延長を認めたが，変形性疾患でT2値がより延長する傾向があった。骨シンチグラフィで椎体に異常を認めた場合，MRI を追加することは，有用な情報をもたらすと考える。

Presented by Medical*Online